

装着・変身！！魔法少女ひめか！

くマジカルえっちで強くなくれっ☆く

草加直人

プロローグ 誕生！魔法少女ひめか！

世界には明確な悪が存在した。

世界征服を目的とし、活動している集団。

自らを「ブレイカーズ（壊す者）」と名乗る組織。

彼等は汚れた世界の浄化をかかげ、各国で

要人の暗殺や爆破テロ、サイバーテロなどの様々な破壊活動を行っている。

その存在が明るみになった時、当然世界は黙っていたいなかった。各国が武力による圧力を一斉に向け、ブレイカーズはその存在を抹殺される筈だった。

だが、彼等は更なる武力を所持していた。銃弾や砲弾による攻撃を寄せ付けない強靱な肉体を持ち、その拳は鋼すらも貫く。オーバーテクノロジーにより造られた、超生物。

ギリシヤ語で天使を意味する「アングロス」の名を彼等によつて付けられたその存在は、圧倒的武力によつて瞬く間に世界を沈黙させた。

圧倒的武力を前にして、武力を持たない国はあつという間に手を挙げ、ブレイカーズの支配下に入った。

大国は屈せず武力を向け続けたが力の差は圧倒的。次々に無力化され、そして力づくでブレイカーズの支配下とされた。

そして一年。

既に世界の半分はブレイカーズの支配下に置かれ、征服されるのも時間の問題だった。

これは、そんな世界で戦う少年少女の物語。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ！！」

「は、はやくっ！ はやく見つけ出さない
とっ！！」

神童明（しんどう あきら）は追っ手から逃れる為に狭い裏道を走りながらも、自分のした事に後悔はしていなかった。

天性の才能を与えられ、この世に生を受け
た明。幼い頃に大学を主席で卒業。

その後には日本国の研究機関へと入り、他者が考えもつかないオーバーテクノロジーを次々に生み出した。

ブレイカーズは彼の才能を買った。彼等は明に最大限の研究機関を提供するのと引き替えに、明を組織へと招き入れたのだ。

「あうっ！？」
無造作に捨てられていたビール瓶につまづきそのまま勢いよく地面に倒れる。胸元に抱えていたものが宙を舞う。

地面に落ちそうになる直前、明が両手を伸ばして受け止めた。

「危ない危ない。精密機械なんだから大事に扱わないとっ」

立ち上がり、再びそれを大事そうに抱える。明は再び走り出す。

「はやく見つけないとっ！これを持つのに相応しい人を！！」

靴音を響かせながら、明はその場を去っていった。

同日。同時刻。

「ねえねえ、ひーめかつ！一緒に帰ろっ

♪
」

「ひゃんっ！？」

突然背後から抱き付かれ、西宮ひめか（に
しみやひめか）は可愛らしい悲鳴を上げ
た。

「もーっ、いきなり抱き付かないでっつていつ
も言ってるじゃないっ！はるちゃんつた
らーっ！」

「にししっ。ごめんごめん」

全く悪ぶれていない様子で歯を見せて笑み
を浮かべる春香（はるか）。彼女はひめかに
とって唯一気兼ねなく接する事の出来る大親
友だった。

腰に手を当て頬を膨らませているひめか。
彼女が体を揺らす度、肩まで伸びた巻き髪が
ふわふわと跳ねる。

丸みを帯びた顔立ちに、ぱつちりと大きな目。僅かに盛り上がっている鼻、その下に位置する薄桃色の唇は小ぶり。透き通った薄緑色の髪は内側に巻かれていて、ほつそりとした首に真っ白な肌。撫で肩からほつそりとした腕が伸びている。彼女の華奢な体を包んでいるのは、胸元の真っ赤なりボンが特徴的なセーラー服。申し訳程度に盛り上がった胸元に、小ぶりのお尻。細い脚は黒のニーソックスに包まれていた。「それよりさ！ あたし昨日すっごいいー感じのお店見つけたんだ！ 今日寄ってかない？」ツイントールを揺らしながら、春香が声のトーンを上げそう言う。そんなハイテンションの春香を前にして、ひめかは申し訳なさそうに眉を伏せた。「あつ、ごめんねはるちゃん。今日は、えつと。一緒に帰れないんだ」

「えええーっ!?　なんでなんでっ!?」
寂しそうな大親友の表情に、ひめかは胸が
締め付けられる。

「ほんとにごめんね?　明日なら大丈夫だか
らっ!」

けれどもひめかはそう言って、胸の前で手
を合わせた。

しばらく不服そうに頬を膨らましていた春
香だけど、やがて溜め息を付くと肩を落と
す。

「しやーない。今日は美衣菜（みいな）で
も弄りながら帰るよー。明日!　絶対行く
からね!」

「う、うんっ!　明日は絶対大丈夫だか
らっ!!」

鞆を手にして友達と一緒に教室を出て行く
春香に大きく手を振り、見送ったひめか。

「えつと」

ちらりと視線を掛け時計に向ける。時計の
針は四時を差していた。

「まだ終わったばかりだもんね。みんな残ってるし、しばらくは教室で時間潰してよつと」

小さくそう呟くと、ポケットから携帯を取り出した。

同日、一時間後。

「あいつらは……うん、いないね。とりあえずはひと安心だけど」

明は乱れた息をととのえようと、壁に手を付き上半身を倒して大きく深呼吸をする。そして今どこにいるのかを把握する為、視線を巡らせた。

気が付くと、商店街を抜けて住宅街までやって来ている。そして彼が手を付いている壁のすぐ近くに、学校の表札が見えた。

「想花学園？」

上半身を起こすと、彼の目には真っ赤に染まる空が飛び込んできた。

同日、同時刻。

「……失礼しまあーす」

音を立てないように静かに教室の扉を開きながら、蚊が飛ぶような小さい声でそう呟くひめか。

訪れたのは、ひめかのクラスがある教室棟とは別の、教室棟。

用心深く誰もいないのを確認すると、ホッと胸を撫で下ろして教室に入り、鍵を掛ける。

そして一つの机に熱い視線を向けた。

「先輩……」

そこはひめかが憧れている先輩。サッカー部主将、大取真二（おおとり しんじ）の机だった。

横目でグラウンドを見るひめか。グラウンドではサッカー部が部活をしている。

黄色い声が教室にまで聞こえてきた。真二

はファンクラブが出来るほど、女子に人気のある生徒だ。

再び机に視線を戻すひめか。机の上には、真二の制服がたたまれて置かれている。

「ああつ。せ、先輩のつ…制服っ」
しばらくジツと見つめていたひめか。次第に呼吸が荒くなり、瞳は潤み落ち着きなくモジモジと足を擦り合わせはじめる。

「も、もうだめっ！ わたしっ、我慢できないっ！！」

ひめかは悲鳴に近い声でそう言うと、真二の制服を手にとると、自らの顔を制服に押し付けた。

同日、一分前。

「こんなところに、僕が求める理想の人がいるとは思えないけど」

誰に言うでもなくそう呟く明。彼は人目を忍んで学校の敷地内へと入り込み、不審者の

ように身を屈めて辺りを見回していた。
ふと、声が聞こえたような気がして窓から
教室を覗き込む。彼の目に映ったのは、キョ
ロキヨロしながら教室に入ってくるひめかの
姿。
「あの子、なにをあんなにキョロキヨロして
るのかな？」
ひめかの拳動が気になり、ジッと彼女を見
つめる明。
制服が置かれている机の前で足を止め、
ジッと見つめている。次第にその表情が赤く
染まっていくのが、明から見ても判った。
そして。
明が見守る中、ひめかは制服を手に取り顔
に押しつけると、机に自らの股間を押し付け
た。
「はあっ、はあっ、はあああっ！？ あ
あっ、先輩っ！ 先輩いい！！」
「これが先輩のにおいっ♪ はっ、はっ、ふ

うっ、ふうっ！！ ああっ♪ 先輩い！！！
真二の制服に顔を埋め、息を大きく吸い込
んでおいを嗅ぎはじめる。
そして机に股間を押し付け、腰を上下に動
かし秘部を刺激するひめか。
「ああっ！ き、気持ちいいよう！ 先
輩っ、気持ちいいですっ！ 気持ちいいです
ううっ！！」
「わたしっ、先輩の机でしちゃってるよっ！
しちゃってるよお！ こんなエッチな事し
ちゃってるっ！ んんっ！ ふうう
うっ！？」
夕焼けに赤く照らされる教室。その中で、
ひめかの肢体が怪しく揺れている。
机がガタガタと音を立てるくらい激しく腰
を振るひめか。既にショーツに染みが出来る
ほど秘部からは愛液が溢れ、机の角にまで付
着している。
「先輩っ！ わたしだめっ！ きちやうっ、
イツちやうっ！ あっ、あっ、つふうううう

うくくつ！！？？」
背筋を伸ばして何度も体を跳ねさせるひめ
か。シヨーツから染み出した愛液が太股を伝
い、ポタポタと床に滴り落ちる。
内股になり何度も体を揺らしてから、やが
て机にその身を預けた。
「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ！！あ
あつ、イツちやつたよおお。先輩の制服の
におい嗅ぎながら、机でして……イツちやつ
たああ♪」
うつとりとした表情で真二の机に突っ伏す
ひめか。そんなひめかの余韻を吹き飛ばすよ
うな明の声が、教室に響いた。
「見つけたっ！！見つけたあああつ！！」
「ひゃあつ！？」
突然の大声に顔を上げるひめか。明が窓を
開けて興奮した様子でひめかを見ていた。
「な、なにっ？誰っ？み、見てた
のっ！？」

すっかり混乱してしまっているひめかは、
耳まで真っ赤になって目を白黒とさせてい
る。そんなひめかとは対照的に、すっかり興
奮した様子の明。サッシに手を付いてよじ登
ると、土足のまま教室に足を付く。
そしてひめかの前までやって来ると、強く
手を握り締めた。

「君こそ僕の探していた、理想の女の子だ
よ！！」

そう言って激しくひめかの手を上下に振
る。ひめかはただ、きよとんと目を丸くした
まま手を振られるままになっていた。

「あ、あの。理想の女の子？ それって一
体……」

ひめかが言葉を続けようとした刹那。背後
で大きな爆音が響き、そしてすぐに悲鳴が聞
こえてきた。

「なにっ！？」

慌てて窓の方へと足を向けるひめか。身を
乗り出すように音のした方を見る。

もうもうと土煙が立ちこめる中から、重い足音を響かせて姿を現した存在。その存在を見て、ひめかと明が同時に声を発した。

「アングロスっ！？」

そこにいたのは、ブレイカーズの誇る最強生物兵器。

上半身だけ不自然な程筋肉で膨れ上がっていて、下半身は人間のそれと変わらずボロボロのジーパンを履いている。

頭には頭髪はなく、目は細く吊り上がっていて真っ赤な光を放っていた。

その顔はまるで殴られたかのように膨れ上がっており、異形さを際立てている。

アングロスは真っ白な息を吐き出しながら、ゆっくりとした足取りで校庭へと入ってきた。

「ど、どうしてアングロスがこんなところにつ！？日本はブレイカーズの支配下なんだよ！？」

そう、日本は既にブレイカーズの力に屈し

て支配下に置かれている。アングロスが現れるなど、有り得ない事だった。

「まさかアングロスまで投入してくるなんてつ。組織は余程僕とこれを恐れてるみたいだね」

小さな声でそう呟く明。しかしその声は目の前の光景を見て呆気にとられているひめかには届かない。

「た、助けてっ！！」
ふと、誰かの声が響く。アングロスとひめか達との間。そこに一人の男子生徒が倒れていた。

「真二先輩っ！？」
そこにいたのはひめかの憧れているサツカ―部の主将、真二。

大粒の涙をこぼして狂ったように首を振りながら、尻を地に付けたままずると引き下がっている。

真二はアングロスを前にして腰を抜かしてしまっていた。そして彼の友人達も、先程ま

で黄色の声援を送ってた女の子達も、自分の事に精一杯で彼を助けるなど考えもしなかった。

しかし、ひめかは違った。

「先輩っ！！」

サツシに手をかけると、ひめかは窓から校庭へ飛び出そうとする。しかし明が彼女の腰に抱き付き、止めた。

「何をしているんだっ！？君のような子が行っても、命を落とすだけだよ！？」

「そんなの判ってるっ！！……け
どっ！！」

振り向いたひめかの目からは、大粒の涙が溢れていた。

「真二先輩を見捨てるなんてできないよっ！！わたしの大好きなっ、憧れの先輩なんだもんっ！！」

迷いなくそう口にしたひめか。彼女の瞳に宿る強い意志に、明は言葉を口にした。

「彼を助けたいかい？」

「当たり前前だよっ！！」

「だったら、方法がある。たった一つだ

け、彼を助ける方法が」

「えっ？」

そう言うのと、明はひめかに向けて何かを差し出した。それは、金属製のバンドと奇形のバックルが付いているベルト。明が先程まで大事そうに抱えていた物。

ひめかは呆然と、差し出された物に視線を向ける。奇妙な形をしているが、どこからどう見てもただのベルト。

「えつと、これなに??」

「彼を助ける為の、唯一の方法だ」

そう言うのと明はまだ呆然としているひめかの腰に、ベルトを巻き付け留め金で固定してしまふ。

「きつと君なら、このベルトを十二分に扱える筈。僕の目に狂いがなければ」

「??」

「さあ！行ってくるんだ！！」

「う、うんっ！！」

そう促されてひめかは窓を乗り越え校庭へと足を着いた。

「真二先輩っ！！早く逃げてください！」

その声に、真二とアングロスが視線を向けた。

「…ミツ、ケタ…」

しわがれた声でそう言ったアングロスが、真っ直ぐひめかに向くと、ゆっくりとした足取りで近付いていく。

真二からアングロスが離れたのを見て、ようやくひめかは胸をホッと撫で下ろす。しかしすぐに、自らに近付いてくるアングロスに恐怖を感じた。

「こ、今度はわたしが逃げないとっ」

「違う！そうじゃないよ！！」

踵を返して逃げようとしたひめかに、明は大声で叫んだ。

「そのベルトを手にした事で、君はアングロスを倒す力を手に入れたっ！！」

「ベルトに強く念じるんだ！ なんでもい
い！ 君の強い意志をベルトに伝えるん
だっ！！」
明に振り向くひめか。真剣な表情の明は、
大きく頷く。
強い意志。ふたたびアングロスの背後にい
る真二に視線を向ける。
「先輩を助けたいっ。わたしは、先輩を守
るんだっ！！」
ひめかの声に、ベルトが光を放つ。その光
はあつという間にひめかを包み球体を形作
る。
「な、なにっ？ あああああつ！！？？」
ベルトから放射状の青い光が溢れる。その
光はあつという間にひめかの衣服を消滅させ
てしまう。
「ええっ！？ な、なにこれっ！？」
裸になった自らの体を抱くひめか。
球体の中で渦巻いていた青い光が、ひめか
の体を覆っていく。

その光はブーツとなりひめかの足を覆い、手袋となりひめかの手を覆う。

青いラインが体全体に走ると、そこから純白の光が広がるようにして、そして光は服へと姿を変える。

大きな青色のリボンが出現し、そしてひめかの手に長く伸びた光が収縮されていく。光の殻を破るようにして、金色の杖が出現した。

やがて光が収まると、ひめかは先程までの制服とは打って変わった姿に変わっていた。

頭には大きな青いリボン。服はレースがついていて可愛らしく、様々な装飾品が付いている。

そして、今にもパンツが見えそうな程短いスカート。足はフリルの付いたニーソックスに包まれていて、そして手と足には複雑な魔術文様の施されたブーツと手袋が付けられている。

そしてひめかの手に握られている、金色の

杖。杖の先端には青色の大きな宝玉がはまつていた。

しばらく自らを覆っている服を物珍しく見つめていたひめかだけれど、すぐにスカートの短さに気付き小さな悲鳴を上げてスカートを押さえる。

「ひゃんっ！？　な、なんなのお？　これっ！」

「凄いつ！！　ファーストコンタクトで既にベルトの力を引き出しているじゃないかつ！」

混乱するひめかとは対照的に、明は鼻息を荒くしてすっかり興奮した様子。ひめかはモジモジと落ち着きなく足を擦り合わせながら、明に視線を向ける。

「ね、ねえっ？　これ何なのっ？　もー訳わかんないよお！！」

明が口を開こうとして、しかしその声を掻き消すようにアンゲロスが雄叫びを上げた。

「グルオオオオっ！！　ソシキノ、テキ！」

クロス！！」

鋭い目つきでひめかを見ると、足音を響かせながら駆け足で迫ってくる。

そして丸太のような腕を振り上げると、ひめかに向けて振り下ろした。

「危ないっ！！」

思わず真二が声を上げる。その直後、辺りに爆音が響き土煙が上がった。

真二も他の生徒や教師達も、唇を噛み締めて悲しそうな表情を浮かべる。唯一、明だけが不敵な笑みを浮かべていた。

そして彼は視線を空へと向ける。そこに、彼女はいた。

「う、うそっ？ わたし飛んでるのっ！？

飛んじやってる！！」

ひめかは拳を避けようと軽く身をかわしただけだった。しかしベルトによって強化された彼女の体は、校舎の屋上に届く程飛び上がっていた。

そのまま膝を折って着地するひめか。自ら

の変化に彼女が驚くばかり。
そんな彼女を鋭く睨んでいるアングロス。
再び拳を振り上げて挑み掛かってくる。
コンクリートを容易に破碎するその拳を、
ひめかは紙一重でかわしていく。
「『パワー型』のアングロスを送り込んでき
て助かったよ。いくらパワーがあっても、
当たらなければ意味ないもんね」
そう言つて不敵な笑みを浮かべる明。アン
ゲロスが呻きを漏らして明を睨む。
敵意を向けられて、慌てた様子でひめかに
言う。
「い、今の君ならそいつを倒すのは簡単
だつ！ 杖に思いを込めて！ アングロスを
滅ぼしてやるつて思いを！！」
「え？ い、いきなりそんな事言われて
もつ」
「はやく！ 君の大切な人が傷付いてもいい
の！？」
その言葉にハッと真二を見るひめか。アン

ゲロスがこの場にいる限り、真二に危険が及ばないとは言い切れない。

ひめかは真二を助けたい一心で、杖をアンゲロスに向ける。そしてアンゲロスを滅ぼす思いを強く持つ。

「いなくなっちゃええええっ！！！」

その声に呼応するように、杖の宝玉が光が溢れた。

そして光が宝玉から放たれる。

アンゲロスが腕を十字に交差してその身を守ろうとする。しかし光は腕もろとも、アンゲロスの上半身をあつという間に消滅させた。

下半身だけとなったアンゲロスは、力なくその場に倒れる。しばらくけいれんを続けていたけれど、やがて動きを止めた。

「はあっ、はあっ！ た、倒しちゃった。わたしがアンゲロスを……」

杖を落として呆然とするひめか。

「あ、あの……君っ」

声に振り向くと、真二がひめかをジッと見つめていた。いまだに状況をよく把握できていないひめかだけれど、真二が無事でいられた事に、ホッと胸を撫で下ろした。

「あ、あの。先輩わたしっ」

ひめかが言葉を続けようとした、その時。彼女の体が再び青い光に包まれる。光は弾けると、大気に四散して消えた。

「先輩、わたしっ！！」

ひめかはずっと抱いていた自らの気持ちを真二に伝えようと、口を開く。

けれども頬を赤くして呆然と自分を見ている真二に気づき、そして自らに視線を向けた。

「いつ……いやあああ

あ……っ！！？？」

彼女は、何も身に付けていなかった。制服もスカートも、下着すら。

自らの体を抱きしめてその場にしがみ込む。大好きな先輩に裸を見られてしまった。

ひめかは耳まで真っ赤になって恥ずかしさに
涙を浮かべる。

「一体なんなのお！？ もういやっ！ いや
あああーっ！っ！？？」

ひめかの悲痛な声が、辺りに響き渡った。

※体験版はここまでです、続きは製品版でお
楽しみください。